

いうが、血液の意味にも循環の意味にも用いられることがある。

循環している血液は、気・血を含んでおり、このうちの濡養作用を血という。西洋医学の貧血の場合には、血液が含む気と血の両面の機能低下が生じるので、気虚あるいは気血兩虚として発現することが多い。なお、血を機能面と物質面に分けると、機能面は「営気」、物質面は「営血」といわれ、血液のことをたんに「営」と呼ぶこともある。血の機能は、具体的には主に動脈血のもつ栄養と滋潤の作用に相当する（図2-5）。

E. 津 液

津液とは、体内のすべての生理的な水液を意味する。細胞内外の液・唾液・胃液・腸液・関節腔や腹腔内の液・涙など、すべてを含めた組織液に相当する。汗・尿も津液から生成される。

1 津液の生成と運行

津液は、飲食物（主として飲み物）から脾胃で運化された水穀の気（栄養物質）の液性部分で、一部は脈中に入り心の働きで赤い血に変化するが、大部分は三焦という通路を運行して全身に布散し代謝される。胃に入った飲食物は腐熟を受けて、その有用な液体成分は脾に送られ、さらに津液として肺に輸送され、肺の宣散・肃降作用によって全身にくまなく散布され、各臓腑で代謝されて次第に下降し、不要になった津液は尿として膀胱に貯留されて排泄される。この津液の代謝全般に重要な役割を果たすのは、腎の「蒸騰気化」であり、腎陽の温煦によって津液を蒸気のように変えて上昇・周流させ、代謝の全般を推

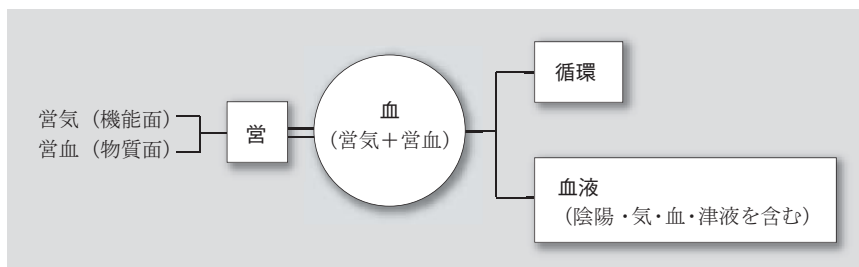


図2-5 血の意味の違い

動している。各臓腑の代謝をうけて下降してきた水液のうち、有用な部分は蒸騰気化によって再度代謝過程に供給され、不用な部分は膀胱に貯留されて適宜排泄される。なお、脾胃の運化にも腎の蒸騰気化が関与し、運化を推進している。また、肝は疏泄によって全体を調節する。

このほか、副次的な水分代謝も存在する。胃が受けとり有用な津液に化生して脾で吸収された以外の余剰の水分は、そのまま小腸に送られる。小腸は「清濁を分ける」機能をもち、胃から下降してきた水分のうち、余剰の水分である「清」を膀胱へ送り、さらに不用な糟^{かす}である固形の「濁」を大腸へ下送する。

この津液の調節過程全般は「三焦気化」の一環であることはすでに述べた。このように、津液の代謝には多くの臓腑が関与しているが、主体は肺・脾・腎である（図2-6）。

2 津液の機能

津液は主に滋潤の作用をもつ。体表部に散布して皮膚・毛髪・うぶ毛などを潤し、涙・唾液などの腺分泌液として粘膜を潤し、臓腑を滋潤し、関節液として関節を円滑に動かすなどである。津液は三焦を通じてあらゆる部位を運行し、組織・器官を滋潤するとともに、気（衛気）と陰陽を載せて全身に散布する。津液の一部は脈にはいって心に送られ赤く変化して血となるので、血との関連性も深い。

3 津液の分類

津：比較的うすい液体で、組織・器官・皮膚・筋肉などに分布する。

液：比較的粘稠で、関節腔・胸腔・腹腔・脳脊髄腔などを満たす。

両者は画然と区別することができないので、通常は津液と総称される。

F. 気・血・精・津液の関係

気・血・精・津液は互いに密接な関連性をもち、概念上は分けることができるが実際には不可分のものである。精は腎に蔵され、血は脈管内に拘束される（図2-7）。相互関係についてはすでに言及しているが、整理の意味で以下にまとめて述べる。

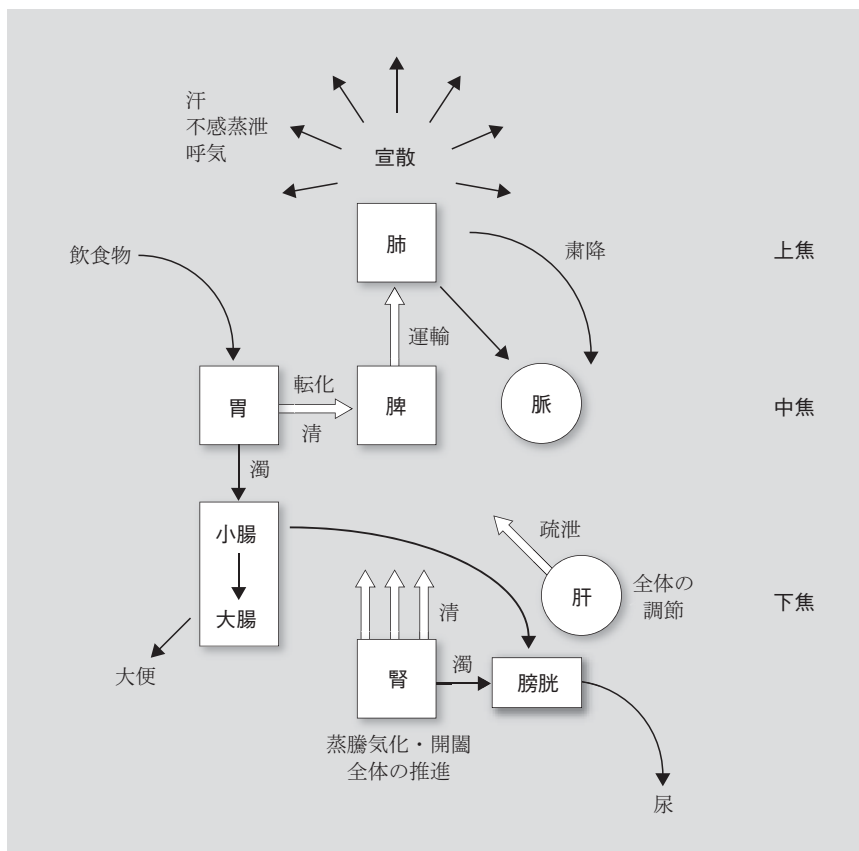


図2-6 津液の調節過程
—三焦気化

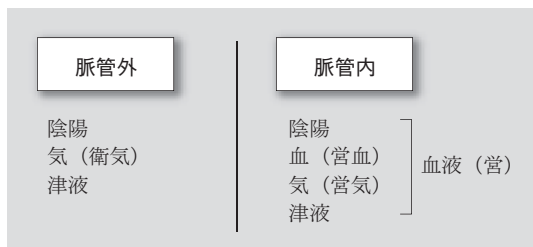


図2-7 脈管内外の陽氣と陰液